

[原著論文]

現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」に関する再考察 —本質および機能を中心に—

羅 雪梅*

The Re-examine of “mood noda” in the declarative sentences of the present tense —based on essence and function—

Setsubai RA*

Abstract

This thesis sets the scope of the study clearly and studies the “mood noda” in the declarative sentences of the present tense and puts forward three elements which was based on the previous research results. Then, through the research of five examples in the literature work, the author put forward the most reasonable and understandable classification criteria, at the same time, the author summed up and analyzed fourteen performance effects of “mood noda” in the declarative sentences of the present tense. At last, the thesis analyzes the function which supposes the effect of “mood noda”.

KEY WORDS : “mood noda”; the performance effects ; essence; function

1. はじめに

本稿は日本語の文末に頻繁に使われる「のだ」表現について、考察しようと思っている。日本語において、話し言葉にせよ、書き言葉にせよ、特に会話の中で「のだ」の使用は驚くほど多い。「のだ」はどのような意味・機能をもって、用いられているのか。また、使うのと使わないのとで、どう違うのか。これまで「のだ」について、数多くの研究者が多方面から考察を施したが、なお包括的で「のだ」の全貌を記述する研究成果は見つかっていない。先行各説はみな一つの解釈の仕方ですべての「のだ」の用法や実質を包括的に説明しようとする姿勢を示している。しかし、『のだ』の問題の難しさは、『のだ』が呈する多様な

現れを、いかに包括的かつ簡潔に首尾一貫した方法で分析・記述するかにある¹⁾

とある。筆者は羅雪梅²⁾で「のだ」の研究範囲を現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」に限定し、構文論の立場に立って、その範囲内の「のだ」の表現効果を考察した。本稿ではさらにこの範囲内の「のだ」の本質および機能を考察したいと思う。

2. 先行研究及び問題点

2. 1. 先行研究の代表説

「のだ」について、多くの研究学者によって、検討され、また数多くの研究成果も出されている。次はその代表説を列挙する。

橋本進吉博士³⁾ (1934) の説

橋本進吉博士は『国語法要説』(昭和9年)の中では、「の」を準体助詞と名づけた:「他の語に附いて或意味を加へて、全体として体言と同じ職能をもつたものを作る」。『私のが』『行くのを』のやうに『のもの』又は『もの』『こと』の意味に用ゐられる。『準体助詞の『の』は『行く』に附いて『行くのは』『行くのが』『行くのを』『行くのだ』等の文節を作る』との見方を示している。

橋本は「私のが」「行くのは」「行くのが」「行くのを」「行くのだ」などの「の」を全く準体助詞と呼んで同一視していることが分かる。

林大⁴⁾ (1964) の説

林大氏(1964:285, 286)は「の」を「いったん判断された内容をもう一度なんらかの判断の材料にするためのはたらき、いわば、客体化、概念化のはたらきをする」。「二重判断の第二次判断にあずかる」と説明している。

山口佳也(1975)の説

山口佳也(1975:226)も先行学者の説を分析した上で、「のだ」の「の」を「他の語句について全体として体言と同じ資格の語句を作る語」だととらえている。また、構文論的に解明しようとし、「～のは～のだ」という表現を「のだ」文の基本形とし、提出した。そして、「のだ」文は「～ということは～ということだ」という文本来の意味に還元できると考え、「のだ」文について、統一的な説明をしている。

三上章⁵⁾ (1977) の説

三上章(1977)も早く「のだ」の研究に携わった一人である。「のである」を「準用言(準詞)」と見なしている。

また、「何々スル、シタ」を単純時にし、「何々スル、シタ+ノデアル、アッタ」を反省時と呼んで、設定する。

さらに、両者の違いを下記のようにまとめている:
単純時:直接経験——報告——独立的——順
反省時:間接経験——解説——關係的——逆

佐治圭三⁶⁾ (1981) の説

佐治圭三⁷⁾ (1986:7)は橋本の準体助詞説に基づいて、準体助詞をさらに三つに分けた。

a, この辞書は私のだ。(下略の「の」)

b, 私の買ったのはこの辞書だ。(準代名助詞の「の」)

c, 私が昨日辞書を買ったのを知っていますか。(狭義準体助詞の「の」)

なお、狭義の準体助詞について、佐治(1981:5)は「述語の連体形についてそれを体言化する助詞である」と定義づけている。これまでとらえがたい、問題になっている「のだ」はまさにこの狭義の準体助詞「の」に「だ」を後接したものである。

具体的には佐治(1981:6)は次のように述べている:

「定義的に述べるならば、“のだ”は、その上にある文によって表されている判断が、その判断の出でくる状況(その状況の中には話し手が心の中でよく知っているといったことも含まれる)から、そのまま成り立つと認める表現であり、上の文の判断を確かなものとして認定する表現である。状況に基づいて、“のだ”の前に述べられた事態がすらすら成り立つことの認定をする表現であるといっても良い。もっと簡単に、客観的な真実として述べるものだとも言えよう。そこから、解説、説明、説得的な感じも出てくるのである。」

「“～のだ”の前は述語の連体形になっている。述語の連体形によって、表される判断は、話し手(の主観)が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手(の主観)の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である。…“だ”はそれをもう一度主観的に断定するものである。」(佐治(1981:7, 8))

2. 2. 以上各説のまとめ

以上、主な学説を一通り見てきたが、「のだ」についての認識は細部で違いがあっても、ほぼ一致しているところがかかなり多いと言える。一応まとめてみると:

「の」の品詞について:橋本「準体助詞」説の上で、更に佐治が「狭義の準体助詞」と名づけた。山口も「の」の体言化機能を認めている。例外は三上章で、「準詞」と呼んでいる。

「のだ」表現の意味・機能について:用言に「の」をつけて、用言を体言化する。そして、話し手が遠くで見えるように、「の」の前の内容を客体化し、さらに、「だ」をつけて、二重判断にするわけである。ただし、山口は「～のは～のだ」という基本形にあてはめて、「のだ」を解説している。

2. 3. 先行研究の問題点

以上の各説はみな一つの解釈の仕方ですべての「のだ」の用法や実質を包括的に説明しようとする姿勢を示している。しかし、仁田義雄が野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』の序において、述べたように、『「のだ」の問題の難しさは、『のだ』が呈する多様な現れを、いかに包括的かつ簡潔に首尾一貫した方法で分析・記述するかにある』。たしかに「のだ」をめぐる問題はとても一言で説明しきれないようである。研究者自身の見方にかかなり接近し、自分の説に有利な例だけをいくつか挙げて、すべての「のだ」の全貌をとらえようとするのはどうしても無理で、また厳密さに欠けていて、非科学的であるように思われる。「のだ」のある方面の性質をつかむことができるといっても、すべての方面にわたるような説明が尽くされていないと感ぜずにはいられない。そのため、本研究ははっきりと「のだ」の研究範囲を限定し、構文論の立場に立って、その範囲内の「のだ」の種種相を取り上げることにした。羅雪梅²⁾と同じように、「のだ」の研究範囲を現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」に限定し、その範囲内の「のだ」の本質および機能を考察しようと思っている。

3. ムードの「のだ」とは

羅雪梅²⁾では、すでにスコープの「のだ」という概念を紹介した。本稿ではスコープの「のだ」を排除した後のムードの「のだ」を検討する。

3. 1. ムードの「のだ」という概念の導入

まず、例文を見ながら、検討を進めよう。

(1) 風邪をひきました。雨に濡れたのです。

(久野暲⁸⁾ (1979: 144))

(2) 体重が10ポンド減りました。病気なのです。

(同)

久野暲はこのように「のです」の意味を分析している：私が風邪をひいたことの説明は、雨に濡れたことです。体重が10ポンド減ったことの説明は、病気であることです。つまり、「のだ」は話し手の説明を与える役割を果たしているのである。

あきらかに、ここでの「のだ」は否定や断定などのスコープを広げたり、事態の成立以外の部分をフォーカスに際立たせるスコープの「のだ」とは根本的に異なる。準体助詞「の」もやはり前の部分を体言化するが、「のだ」全体の機能はそれだけにとどまらない。

むしろ、一種の心的態度を表すことになっているのである。

中右実⁹⁾ (1999: 29) によると、「文の意味はくモダリティ>とく命題>からなる」という。そして、「モダリティはく発話時点における話し手の心的態度>のことをいう。ただし、発話時点はく瞬間的現在時>と解されるものとする。…モダリティはく発話時点><話し手><心的態度>という三つの要素概念の組み合わせである。」

また、宮崎和人¹⁰⁾ (2000: 50) は次のようにムードを説明している：「モダリティを「文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける、文レベルの機能・意味的カテゴリー」と規定し、その表現手段の中核としてある、単語レベルの文法的=形態論的カテゴリーをムード(叙法)と呼ぶ。ムードとは、述語の語形変化(活用)によるく基本叙法>とその形態論的展開(否定・疑問・推量)によって形作られた語形相互のパラディグマティックな対立関係として存在する、モダリティの基本システムである。」つまり、ムードはモダリティの中核である、文法的=形態論的カテゴリーなのである。

したがって、(1)(2)のように、話し手の発話時の心的態度を表し、具体的な文法表現手段の一種である「のだ」は、ムードの「のだ」と位置づけられるべきである。

3. 2. ムードの「のだ」の本質

2.2.先行研究各説のまとめのところですでに指摘したように、「のだ」を研究する先行学者の認識はほぼ一致している。特に、「の」の品詞(準体助詞であること)及びその体言化機能はもう疑う余地もないほど、定説になっている。これはスコープの「のだ」についてもムードの「のだ」についても、当てはまる。本稿もその見方を認めて、それに従う。すると、ムードの「のだ」は実際に、「の」によって、一度前の用言節を体言化し、それから「だ」を再び加えて、提出することになる。この点に関して、先行研究をもう一度より詳しく見ていこう。

林大 (1964: 285, 286, 287)

このノは、いったん判断された内容を、もう一度なんらかの判断の材料にするためのはたらき、いわば、客体化、概念化の働きをする。

ノ(ダ)は、かくて二重判断の第二次の判断にあずかる。しかじかという判断(内容・事実)

が成立する、という判断に関係する。

- (3) ……壮大とも華麗とも言いようのない美観である。その灯の海に吸いつけられるように見入っていると、飛行機は大きく旋回しながら、徐々に下降していく。一つの灯がみるみる大きくなっていく。ロンドンへ来たのだ。
(北村喜八)

現前する事実をそのままに述べきって、最後に一つの判断を自ら納得する、段落や文章の末尾におかれるノダがある。

三上章 (1977 : 239)

(何々スル+ノ) + デアル を
何々スル+ (ノ+デアル) と

括り直す。この連体部分「何々スル」を既成命題とし、それに話手の主観的責任の準詞部分「ノデアル」を添えて提出するというのが反省時の根本的意味だろうと思う。

佐治圭三 (1981 : 7-8)

「~のだ」の前は述語の連体形になっている。述語の連体形によって表される判断は、話し手(の主観)が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手(の主観)の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である。

「~のだ」の「の」は、その前の述語の連体形によって表される判断をいったん固定化し、「だ」はそれをもう一度主観的に断定するものである。この「だ」は「か」にかわって疑問になったり、「だろう」に替って推量になったりする。が、いったん固定された「述語の連体形+の」の部分には変わらないのである。

(4) あなたは行きますか。

(4') あなたは行くのですか。

(4) は、「あなた」が「行く」か「行かない」かを聞いている文であるが、(4') は「行くの」はもうだれかが行くにきまっていて、「あなた」は「行く」グループに入るのか入らないのかを聞いていたり、あるいは「あなた」のそぶりや「あなた」をとりまく状況から、話し手が「あなたは行く」という判断をいったん下して、そのことの当否を相手に確かめていたりする文なのである。

吉田茂晃¹¹⁾ (1988 : 46)

…ノダ形式とはく準体助詞「の」+述語化要素>であるということになるだろう。

◇ ノダ形式は、叙述内容をいったん句の体言とし、然る後にあらためてその体言句を述語形式たらしめる。

手短かに言えば、<叙述の体言化とその再述語化>がノダ形式を用いる表現の構造であるということである。

以上、先行研究を見てきたが、「客体化、概念化」「二重判断の第二次の判断」；「既成命題」「話手の主観的責任」；「客体的に成り立つ判断」「もう一度主観的に断定」；「叙述の体言化とその再述語化」など、用語はさまざまであるが、中心的意味はほぼ同じであると言える。

そこで、本稿も先行諸説を踏まえて、ムードの「のだ」の本質を以下のようにまとめる：

準体助詞「の」によって、前接部分を体言化し、それを体言に準じる形にするとともに、既定の事態にもする。そうした中で、話し手の発話時の心的態度を表す。これで、<体言化><既定性>及び<心的態度>はムードの「のだ」の本質三要素になるのである。

羅雪梅²⁾では、先行研究を踏まえながら、計五冊の文学作品に出ている実例を用例として現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」の計14種類の代表的な表現効果を検討してみた。その具体例および表現効果は以下のとおりである。

4. 現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」の代表的な表現効果

4. 1. 理由

I 追加理由：(「P. Qのだ。」)

(5) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。
(白川博之¹²⁾ (2002 : 282))

(6) A : これから飲みに行かない？

B : ごめん。明日早いんだ。(同)

(7) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。

(野田春美 (1997 : 64))

(8) 朱子は、さっきから気になっていた。小さなライトが、ずっと後ろをついてくるのである。

(『殺人はそよ風のように』p.18)

(9) 克彦は、ハッと頭を上げた。——首が痛い。それも当然で、机に突っ伏したまま寝ていたのだ。(同p.27)

(10) 明らかに様子がおかしい。看護婦や医師たちが、病院の外を駆け回っているのだ。

(同 p.84)

II 発言の根拠：(「Qのだ. P.」)

(11) 時間がないんだ。(ダカラ) 急いでくれ。

(田野村忠温¹³⁾ (1992: 48))

(12) 予算は十分にあるのです。自由に使ってください。

(田野村忠温 (1992: 49))

(13) お金があまりないのです。無駄遣いをしないでください。

(同)

(14) 君がそう言うんだ。間違いはあるまい。

(同)

(15) こんなに一生懸命勉強したんだ。試験に落ちるはずがないよ。

(白川博之 (2002: 290))

(16) 君は大学生なんだ。もっと勉強しなさい。

(同)

III 先触れ：(「Qのだ. P.」)

(17) 先生、お話があるんです。お部屋に伺ってもよろしいでしょうか。

(白川博之 (2002: 288))

(18) A: 実は私田中さんと結婚するんです。

B: それはおめでとう。

A: それで、先生に仲人をしていただきたいんですが。

(同)

(19) 「小花井村に行ってみたいんです。場所を教えてくださいませんか。」

(野田春美 (1997: 96))

4. 2. 推量

(20) あっ、財布がない。電車の中ですられたんだ。

(田野村忠温 (1992: 22))

(21) あんなに喜んでいて。よほど嬉しいんだ。

(同)

(22) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。

(野田春美 (1997: 64))

(23) (デパートで泣いている子どもを見て) きっと迷子になったんだ。

(白川博之 (2002: 282))

(24) きっと眠っちゃったんだわ、と思った。

(『殺人はそよ風のように』 p.47)

(25) ——夏美は、克彦が待っている場所へと戻った。

「何だ、そうだったのか」

と、克彦は、話を聞いて、「じゃ、千絵の奴、

待ち呆けで帰っちゃったんだ、きっと」

(同 p.185)

(26) ——全部の引出しが一杯に飛び出し、中を引っかき回されている机の姿だった。

克彦も加わって、三人でしばしばポカんとそれを眺めていたが……。

「誰かが先に来たんだわ」

と、夏美が呟くように言った。

(同 p.204)

以下の二例は運命的な見方で推測する。

(27) いくらがんばっても、どうせ負けるんだ。

(田野村忠温 (1992: 31))

(28) この商店街もデパートやスーパーに客を奪われてさびれていくんだと思うよ。

(同)

(27) は、例えば、八百長の試合の場合について判断する。試合が終わる前に、既に結果が定まっているので、「どうせ負けるんだに違いない」とあきらめる。そして、(28) では、事実として商店街はまださびれていなくても、話し手の意識の中で、既に運命論的にそう推量したのである。この場合、ムードの「のだ」の表現効果は、ムードの「のだ」の本質——既定性(「の」をつけることによって、前の用言節で述べた内容を既定の事態にする)によるのであろう。

4. 3. 換言

I 原因が含まれる場合：(「PのはQのだ.」)

(29) 外で音がするのは雨が降っているのだ。

(山口佳也 (1975: 227))

(30) 皮膚が荒れているのはビタミンが不足しているのだ。

(吉田茂晃 (1988: 47))

(31) 田辺 俵さんの歌が流行ったのでたくさんああいうふうな歌が出るけど、心に響かないのは、奥に物語がないんですね。

(野田春美 (1997: 77))

II 推論が含まれる場合：(「P. Qのだ.」)

(32) 明日は入社式だ。明日からは社会人なのだ。

(白川博之 (2002: 284))

(33) 彼は16歳から18歳までカナダにいた。カナダの高校で勉強したのだ。

(同)

(34) A: 「ここには誰も住んでいませんよ」

「ふーん、空き部屋なんだ」

B: # 「ふーん、空き部屋だ」

(野田春美 (1997: 82))

(35) しかし、それは僕だけではない。街を歩いているほとんどの人々が、頭にヘッド・ギアを

装着している。皆、この“アドバイザー”のさ
さやきどおりに行動しているのだ。

(『デジタルな神様』 p.78)

(36) 彼はそこから外に出ていった。ところが、
彼はそれから二度と帰ってこなかった。彼は脱
走したのだ。(同 p.91)

(37) 男には、職もなく、家もなく、歩いてはい
ても、どこへ行くというあてもなかった。

要するに、薄汚れた一人の浮浪者だったのだ。
である。(『殺人はそよ風のように』 p.7)

(38) 今、警察は、夏美を指名手配してはいない。
一応重要参考人にでもするのが当然のような気
もするが、なぜか、それもしていないのである。
つまり、本当に夏美が疑われているとは限ら
ないのだ。(同 p.170)

(39) ガンの細胞は通常の細胞と違い、養分と酸
素さえ与え続ければ無限に分裂を続ける。
つまり、不死細胞なのである。

(『デジタルな神様』 p.24)

4. 4. 確認

(40) へえー、じゃあキミはひとりっこなんだ。

(吉田茂晃 (1988 : 51))

(41) あー、そうなんだ。(相槌) (同)

(42) 「伊達が勝ったって」

「へーえ、伊達が勝ったんだ」

(野田春美 (1997 : 88))

(43) うさぎさんのお耳にはね、体温を逃がすと
いう大事な役目があるのよ。

——ふーん、うさぎさん、暑がりなんだね。

(田野村忠温 (1992 : 18))

(44) 「学会や、研究の打ち合わせには出て行きま
すが、それ以外、研究所を離れることは滅多に
ありません」

「よほど、この街がお好きなのですね」

「街というより、氷が好きなんだと思います。

…」(『流水への旅 (上)』 p.72)

(45) 「去年は流水が、りがんしたのが、三月二十
八日でした」

「りがん？」

「岸を離れるということです」

「じゃあ、それまではこうして、氷の上を歩け
るのですね」(同 p.18)

(46) オホーツク沿岸は、稚内から知床まで、ぎ
っしり氷に包まれているらしい。…

「やっぱり北の海は冷たいですね」

「北だから凍るというわけではありません」

(同 p.36)

(47) 「昨夜はお食事をとらなかったのですね」

九時に女中が朝食を運んできていった。

「研究所でいろいろなものをいただいて、お腹
がいっぱいだったのです」

(『流水への旅 (下)』 p.8)

(48) 「…あなたは、まだあの人を愛しているの
ですね」(同 p.227)

(49) A₁ : 「杏子さんを忘れるために、わたしを抱
いたのですね」

B₁ : 「たしかに、初めはそういう気持がなかつ
たとはいきれない。だが今は違う」

A₂ : 「要するに、わたしを慰みものにしたの
ね」(同 p.231)

4. 5. 説明 (「PはQのだ。」)

(50) アノ音ハ何ダ?

——アレハ鳩ノ鳴キ声デス

——アレハ鳩ガ鳴イテイル声デス

——アレハ鳩ガ鳴イテイルノデス

(野田春美 (1997 : 76))

(51) (刑事が容疑者のシャツに血痕がついている
のを見つけて)

コレ (コノ血) ハ何ダ?

——コレハ自分ノ鼻血デスヨ

——鼻血ガツイタンデスヨ (同)

(52) これは友達にもらったんです。

(野田春美 (1997 : 77))

(53) これは庭に咲いている中から選んできたん
です。(同)

4. 6. 告白

(54) ごめんなさい、ガラスを割ったのは僕なん
です。(吉田茂晃 (1988 : 48))

(55) 止めないでくれ、わたしだって辛いのだ。

(同)

(56) 実は私にも同じような経験があるんです。

(田野村忠温 (1992 : 12))

(57) 「実はね、彼、プロポーズしてきたの」

(『流水への旅 (上)』 p.161)

(58) 「いいえ」

と、夏美は首を振った。「今のプロだって、そ
う不満はないわ。いえ——なかったの。でも、

今は、自分の力を試したいの。外へ出て、新しい試みができる……」

(『殺人はそよ風のように』 p.106)

- (59) その二文字(「丈陽」——作者の赤ちゃんの名前)を見つめているうちに、わたしの内側でなにかが発行し、言葉が滑り出てきた。生活や金銭とは関係ない。わたしにとって言葉は血液と同じで、失えば、生きていけないのだ。

(『魂』 p.49)

4. 7. 教示

- (60) お月様ではねえ、ウサギさんがおモチをついているんだ。(吉田茂晃 (1988 : 48))

- (61) 御覧ください。この工程はすべてコンピューターによって制御されているのです。(同)

- (62) この地方ではこうした伝統が今も息づいているのです。(田野村忠温 (1992 : 22))

- (63) しかし、断っておくが、この千絵、丸顔で、少しふっくらしているが、モデルにならないかと誘われたこともあるくらい、可愛い顔立ちなのだ。(『殺人はそよ風のように』 p.30)

- (64) 値段をご覧になって驚かれていますこととは思いますが、このバッジには実に不思議な力があるのです。この商品をお買い求めになることにより、貴方様はきっと、大きな利益を得られることになると思います。

(『デジタルな神様』 p.14)

- (65) A₁ : 「…このシステムについて、ちょっと気になることがあるんですよ」

B₁ : 「気になること、ですか？」

A₂ : 「このシステム、住人が病気になると、療養を強制するようになっていんです。薬を出してくれたり、寝ているように指示してくれるくらいならまだいいのですが、……」

(同 p.59)

4. 8. 強調

- (66) 信じてくれ、俺は確かにUFOを見たのだ。

(吉田茂晃 (1988 : 48))

- (67) 評論家が何と言おうとこの映画は面白いんだ。(同)

- (68) 本当に私は知らないんです。

(田野村忠温 (1992 : 15))

- (69) 確かに、遠くからサイレンの音が近づいて来るのだ。(『殺人はそよ風のように』 p.205)

- (70) A₁ : 「生体移植っていうのは考えないでしょうか」

わたしが二番目に訊くべきことを口にした。

B₁ : 「肺移植は日本でもごく一部でやっているけど、それは肺だけに限った病気のひとに」

C₁ : 「柳さんがいいたいのは、延命のための移植は可能かということなんです」東が補足してくれた。

B₂ : 「世界中どこに行っても東さんの病状で肺移植をやる医者はいませんよ」

A₂ : 「理論的に可能かどうかを知りたいだけなんですよ」(『魂』 p.60)

- (71) …いままでのように斜めになってはいけないのだ。精神を柱のように真っ直ぐに保ち、丈陽と東が倒れかかったとしても、支えられるだけの強度を持たなければならぬのだ。

その覚悟はしている。(同 p.87)

4. 9. 整調

- (72) さとみ「(微笑って) いいのいいの」

(野田春美 (1997 : 99))

- (73) すると、彼女はこう答えたのだ。

「あのね、あたしはサトシ君のお父さんの恋人よ。で、この子はあたしと彼の子供」

(野田春美 (1997 : 100))

- (74) 「あのね、さっき道を聞かれたの。それで、教えてあげたら、すごく丁寧にお礼言われたの。嬉しかったなあ。」

(野田春美 (1997 : 101))

- (75) 美砂 : 「紋別ってとこで、氷を研究している人にあつたの」

康子 : 「氷の研究？」

美砂 : 「オホーツク海に流氷がくるでしょう、その分布や流れを研究しているの」

(『流氷への旅 (上)』 p.168)

- (76) 「本当は、もう仕事なんてどうでもいいのよ。もともとこんなに長く働き続けるつもりはなかったの」(『デジタルな神様』 p.137)

- (77) 永原浜子 : 「いえ——ただ——何となくそう思ったんですの。……」

(『殺人はそよ風のように』 p.173)

- (78) 「大丈夫です。元気ですの」

(野田春美 (1997 : 28))

- (79) 「そこで、私にちょっと考えがありますの」

(野田春美¹⁴⁾ (1993 : 48))

4. 10. 決意

- (80) 俺は行くぞ。行くと言ったら行くんだ。
(吉田茂晃 (1988 : 49))
- (81) それでも、私はこれを成し遂げるのだ。
(同)
- (82) 俺は絶対勝つんだ。(野田春美 (1997 : 99))
- (83) 「行ってみたい」
口のなかでつぶやく。
するとすぐ、それが「行くのだ」という決心に
変わっていく。
(『流水への旅 (上)』 p.221)

4. 11. 命令

- (84) さっさと帰るんだ。
(白川博之 (2002 : 290))
- (85) 立て、立て！立つんだ、ジョー！
(吉田茂晃 (1988 : 49))
- (86) 危ないから、僕が合図をするまでじっとし
ているんだ。(同)
- (87) 落ちついて！冷静になるのよ！
(『殺人はそよ風のように』 p.49)
- (88) 「よく分かっているね？もし連絡があったら、
すぐ僕へ知らせるんだ。警察や記者たちに気付
かれるんじゃないぞ」(同 p.126)
- (89) 「絶対よ！ギョッと目をつぶって、いいって
言うまでそうしてるのよ」(同 p.224)
- (90) 「早く帰ってくるんですよ」
出かける日、母はそういつてから、さらに念を
押すようにいった。
「いいですか、札幌に勤めることなどは考える
んじゃないありませんよ」
(『流水への旅 (上)』 p.224)
- (91) おすわり、すわれ、すわるんだ！
(尾上圭介¹⁵⁾ (1979))
- (92) A : 「働け働け、働くんだ、永尾完治！」
B : ?? 「働くんだ、働け働け、永尾完治！」
(宮島・仁田¹⁶⁾ (1998 : 260))
- (93) A : 騒ぐんじゃないありません！
(野田春美 (1997 : 115))
B : 騒ぐんじゃない。(野田春美 (1993 : 48))
C : 騒がないの。(同)
- (94) 「美人を乗せて運転を間違うんじゃないぞ」
(『流水への旅 (上)』 p.59)

4. 12. 発見

- (95) (それまでわからなかった機械の使い方がわ
かったとき)
そうか。このボタンを押せばいいんだ。
(白川博之 (2002 : 285))
- (96) (掲示板を見て) 明日会議があるんだ。
(同)
- (97) (辞書を調べて) そうか。「知音」というの
は“親友”のことなんだ。
(吉田茂晃 (1988 : 50))
- (98) 「へえ。あんなわけの分かんないものに夢中
になる奴もいるんだな」
と、克彦は、素直な感想を述べた。
(『殺人はそよ風のように』 p.40)
- (99) 千絵が、上目づかいに雅子を見ながら言っ
た。「彼女と……会ったの？」
「お風呂場でね」
「お風呂！」
克彦が素頓狂な声を上げた。「そうか！彼女、
大の風呂好きなんだ」
(『殺人はそよ風のように』 p.130)
- (100) (「伊達が勝った」という新聞記事を読みな
がら)
「へーえ、伊達が勝つんだ」
(野田春美 (1997 : 88))
- (101) (蛍を見かけて) こんな都会にも蛍はいる
んだなあ。(田野村忠温 (1992 : 19))
- (102) ほんとに花子ちゃんっておねだり上手なの
ね。(田野村忠温 (1992 : 20))

4. 13. 再認識

- (103) すっかり忘れてたなあ。あいつは阪神ファ
ンなんだ。(吉田茂晃 (1988 : 50))
- (104) 「そうそう、思い出した。ここにポストが
あるんだ」(野田春美 (1997 : 88))
- (105) しかし——恋人でも待っているにしては、
その表情はあまり浮き浮きしているとはいえな
かった。
俺だって昔は恋なんてものをしたことがあった
んだ、と浮浪者は思った。いつのことだったか、
どんな女だったかも、忘れちまったが……。
(『殺人はそよ風のように』 p.10)
- (106) そうだ。今日は『マイ・ベイビー』の発売
日だったんだ。(『デジタルな神様』 p.155)

4. 14. 客体化

(107) A：私はうれしい。

B：*あの人はうれしい。

C：あの人は（きつと）うれしいんだ。

（野田春美（1997：65））

(108) あの人だって悲しいのよ。

（吉田茂晃（1988：51））

(109) 朱子は、もともと看護婦になりたかつたの
である。（『殺人はそよ風のように』 p.21）

このように、羅雪梅²⁾では現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」による表現効果を分類し、整理してきたが、各種の表現効果が完全に截然と異なっているとは限らない。重なったり、つながったりする部分も少なくない。本研究で、とりあえず、個々のムードの「のだ」の最も目立っており、顕著な、他のムードの「のだ」の表現効果と容易に区別できる表現効果を列挙した。吉田茂晃¹⁷⁾（1991：73）は既にこのように指摘している：「『のだ』には様々な表現効果を託し得る素地があり、それらを一つ残らず数え挙げることはたしかに（厳密には）不可能である。たとえば豆腐は、冷奴にすることもできれば湯豆腐にもでき、揚げだし豆腐にも麻婆豆腐にもできる——というように、代表的な豆腐料理を並べたてるとはできるけれども、豆腐料理のすべての種類を数え尽くすことは厳密な意味ではできない。それは、豆腐という素材が様々な料理法に耐え得る素材だからであり、また、料理というものが実践的な臨機応変なものだからである。ちょうど同じように、「意味的には何らの積極的な役割も果たさないもの」である「のだ」は、表現という臨機応変な作業の場で常に新しい用法を担わされつつあり、したがって「のだ」が最終的に何種類の用法を獲得するか、その可能性をあらかじめ数え尽くしておくことは厳密には不可能なのである。」したがって、本稿でも、すべての表現効果を包括したとは保証できないが、ムードの「のだ」を理解するのに、最も代表的な表現効果を挙げるのも、役立つことができるのではないかと思っている。さて、ムードの「のだ」はどのようにしてそれらの表現効果を生み出しているのか、それらの表現効果を支えるムードの「のだ」の機能は何であろうか。

5. 現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」の機能

ムードの形式は、何に対する心的態度を表すかによ

って、大きく「対人的ムード」と「対事的ムード」に分ける。「対人的ムード」は聞き手（或いは、文の読み手）に対する話し手（或いは、文の書き手）の心的態度を表すムードで、「対事的ムード」は事態に対する話し手の心的態度を表すムードである。

例えば、「雨が降るかもしれない」の「かもしれない」は「雨が降る」という事態が起こる可能性についての話し手の心的態度を表すムードで、対事的ムードである。一方、「雨が降るかもしれないよ」の「よ」は「雨が降るかもしれない」ということをどう聞き手に伝えるかを表す話し手の心的態度で、「対人的ムード」である。このように、「対人的ムード」は「対事的ムード」を包むのである。

さて、ムードの「のだ」について、どうであろう。

(5) 昨日は学校を休みました。頭が痛かつたんです。（白川博之（2002：282））

(84) さっさと帰るんだ。（白川博之（2002：290））

(20) あっ、財布がない。電車の中ですられたんだ。（田野村忠温（1992：22））

(97)（辞書を調べて）そうか。「知音」というのは“親友”のことなんだ。（吉田茂晃（1988：50））

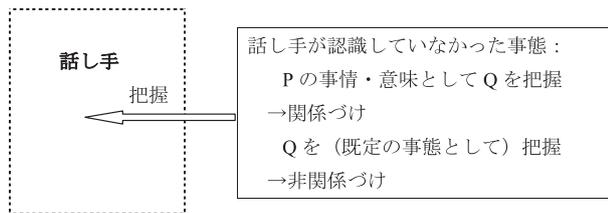
(5) と (84) では、話し手は、既に認識していた事態Q（「頭が痛かった」、「帰る」）を、それを認識していなかった聞き手に提示し、聞き手に認識させようとしている。この場合、必ず、聞き手を必要としている。したがって、(5) と (84) の「のだ」は対人的ムードの「のだ」である。また、(5) では、Qが先行文脈や状況P（「昨日は学校を休みました」）の事情や意味であるため、「のだ」は、QをPと関係づけて提示し、聞き手に認識させているといえる。このような対人的ムードの「のだ」を、関係づけの対人的ムードの「のだ」という。一方、(84) では、QをPと関係づけるために用いられるとは考えにくく、Qを既定の事態として提示し、認識させているだけである。このような対人的ムードの「のだ」を、非関係づけの対人的ムードの「のだ」という。

(20) と (97) では、話し手は発話時において、それまで認識していなかった事態Q（「電車の中ですられた」、「知音」というのは“親友”のこと）を把握している。必ずしも聞き手を必要としない。したがって、(20) と (97) の「のだ」は対事的ムードの「のだ」である。また、(20) では、話し手は、P（「財布がない」）の事情や意味をQ（「電車の中です

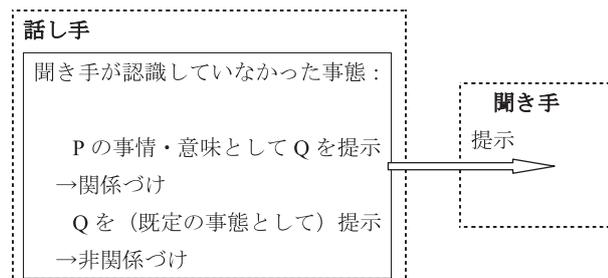
られた」と、推測し、把握している。このような対事的ムードの「のだ」を関係づけの対事的ムードの「のだ」と呼ぶ。それに対して、(97)では、Qを、先行文脈や状況と関係づけて用いられるとは考えられない。Q（「知音」というのは“親友”のこと）を、それまで認識していなかった既定の事態として、把握しているのである。非関係づけの対事的ムードの「のだ」と呼ぶ。

対人的ムードは対事的ムードを包むので、対人的ムードを表す「のだ」は必ず対事的ムードを担う。このように、ムードの「のだ」を、対事的ムードだけを担う、関係づけの「のだ」と非関係づけの「のだ」、対人的ムードも担う関係づけの「のだ」と非関係づけの「のだ」に分けることができる。このように分類できる理由と基準は、まさにムードの「のだ」の機能なのである。その機能を図1で示すと以下のとおりである。

図1
対事的ムード「のだ」



対人的ムード「のだ」



このムードの「のだ」の機能は野田春美（1997）が提唱しているもので、实例に当たってみても、そのとおりである。ムードの「のだ」の表現効果はこの機能によるものであり、また、機能に帰することもできる。本稿で挙げたすべての用例の「のだ」は、具体的にどの種類に属し、どのような機能を果たしているか、その対応関係について、表1を参照してもらいたい。

表1

| 用例番号 | 種類及び機能 | 対人的ムードの「のだ」 | | 対事的ムードの「のだ」 | |
|------|--------|---|--|-------------------------------|---------------------------|
| | | 関係づけ | 非関係づけ | 関係づけ | 非関係づけ |
| | | Pの事情・意味として、Qを提示する | Qを（既定の事態として）提示する | Pの事情・意味として、Qを把握する | Qを（既定の事態として）把握する |
| 1 | 理由 | I 追加理由 | ○ | — | — |
| | | II 発言根拠 | ○ | — | — |
| | | III 先触れ | ○ | — | — |
| 2 | 推量 | (20) (21) (22) (23) (25) (26) (27) (28) | — | (20) (21) (22) (23) (24) (27) | — |
| 3 | 換言 | I 原因 | ○ | — | — |
| | | II 推論 | (32) (33) (35) (36) (37) (38) (39) | — | (34) |
| 4 | 確認 | ○ | — | — | — |
| 5 | 説明 | ○ | — | — | — |
| 6 | 告白 | (54) (55) (59) | (56) (57) (58) | — | — |
| 7 | 教示 | — | (60) (61) (62) (63) (64) (65) A ₂ | — | — |
| 8 | 強調 | (66) (70) | (67) (68) (69) (71) | — | — |
| 9 | 整調 | — | ○ | — | — |
| 10 | 決意 | — | ○ | — | — |
| 11 | 命令 | — | ○ | — | — |
| 12 | 発見 | — | — | (99) (101) (102) | (95) (96) (97) (98) (100) |
| 13 | 再認識 | — | — | — | ○ |
| 14 | 客体化 | (107) | (107) (108) (109) | (107) | (107) |

注：①ある表現効果の用例は全部ある項目にあたる時、「○」で示す。

②用例(20)、(107)などのように、いくつかの理解の仕方が可能なような場合は、それぞれの項目に記される。

6. おわりに

本稿は、狭義の準体助詞「の」+「だ」からなっている、ほぼ一語として認められる「のだ」について、考察した。具体的には、現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」を中心に、検討してきた。そして、現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」の本質、代表的な表現効果及びその機能を明らかにした：

本質：準体助詞「の」によって、前接部分を体言化し、それを体言に準じる形にするとともに、既定の事態にもする。そうした中で、話し手の発話時の心的態度を表す。〈体言化〉〈既定性〉及び〈心的態度〉はムードの「のだ」の本質三要素になる。

表現効果：理由、推量、換言、確認、説明、告白、教示、強調、整調、決意、命令、発見、再認識、客体化など、計14種類の代表的な表現効果である。

機能：
対事的ムードの「のだ」：

話し手が、認識していなかった既定の事態Qを把握する。

関係づけの対事的ムードの「のだ」：

状況や先行文脈Pの事情、意味としてQを把握する。

非関係づけの対事的ムードの「のだ」：

Qを（既定の事態として）把握する。

対人的ムードの「のだ」：

聞き手は認識していないが話し手は認識している既定の事態Qを提示し、それを聞き手に認識させようという話し手の心的態度を表す。

関係づけの対人的ムードの「のだ」：

状況や先行文脈Pの事情、意味としてQを提示し、それを聞き手に認識させる。

非関係づけの対人的ムードの「のだ」：

Qを（既定の事態として）聞き手に提示する。

本論文の研究成果は、日本語の学習において、ムードの「のだ」についての理解を深めたり、日本語教育の場で、実際に少しでも役に立ったりしたらと、本稿を終わらせていただく。ムードの「のだ」だけについても、後は「のだが」「のだから」「のなら」「のだろう」「のか」「のだった」など多くの表現形式が研究される必要があるし、また、文体・性別・地域・年齢などによる違いや使い分けも残っている課題である。それは今後の研究課題に譲ることにさせていただきたい。また、文中、間違いや不備がきつとあると思う、諸賢のご叱正を乞う次第である。

Received date 2012年1月7日

参考文献

- 1) 野田春美 (1997)：日本語研究叢書9「の（だ）」の機能。くろしお出版。
- 2) 羅 雪梅 (2011)：九州共立大学研究紀要。九州共立大学。
- 3) 山口佳也 (1975)：「のだ」の文について。国文学研究 早稲田大学 56号
- 4) 林大 (1964)：ダとノダ。講座現代語6 口語文法の問題点。明治書院。
- 5) 三上章 (1977)：現代語法序説——シンタクスの試み。くろしお出版。
- 6) 佐治圭三 (1981)：“～のだ”の本質。日語学習と研究。1981年3月
- 7) 佐治圭三 (1986)：「～のだ」再説（続）——山口佳也氏・金栄一氏に答えて。日語学習と研究。1986年2月
- 8) 久野暲 (1979)：日本文法研究。大修館書店。
- 9) 中右実 (1999)：モダリティをどう捉えるか。月刊 言語。28巻6号。1999年6月。
- 10) 宮崎和人 (2000)：ムードとモダリティ。日本語学。2000年4月。臨時増刊号。
- 11) 吉田茂晃 (1988)：ノダ形式の構造と表現効果。国文論叢。昭和63年（1988年）3月第15号
- 12) 白川博之 監修 (2002)：中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック。スリーエーネットワーク。第2刷。
- 13) 田野村忠温 (1992)：現代日本語の文法 I ——「のだ」意味と用法——。和泉選書。初版第2刷
- 14) 野田春美 (1993)：「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって。日本語学。1993年10月号 Vol.12
- 15) 尾上圭介 (1979)：そこにすわる！。言語。第8巻第5号。大修館書店
- 16) 宮島達夫・仁田義雄 (1998)：日本語類義表現の文法（上） 単文編。くろしお出版。第4刷
- 17) 吉田茂晃 (1991)：〔書評〕田野村忠温著『現代日本語の文法 I ——「のだ」意味と用法——』『国語学』164 国語学会

用例の出典

- ① 渡辺淳一 (1983)：流水への旅（上、下）。角川文庫。
- ② 赤川次郎 (1985)：殺人はそよ風のように。光文社文庫。
- ③ 渡辺浩弐 (1999)：デジタルな神様。幻冬舎文庫。
- ④ 柳美里 (2002)：魂。小学館。